

バウムテストにおける多数回法に関する基礎的研究

丹 治 光 浩

本研究は、バウムテストにおける描画枚数（情報量）が描画の作者を推定することにどの程度寄与するかについて検討することを目的としている。まず、臨床心理学を専攻する大学生10名（平均年齢20.5歳±0.7歳）を対象に多数回法によるバウムテストを個別に実施し、次に、各学生に対して自分以外の9名の描画の作者を推定することを課した。

得られたデータをもとに、描画の提示枚数が作者的な中率をどのように変化させるかをみたところ、1枚目が16.7%、2枚目が24.4%、3枚目が35.6%、4枚目が37.8%、5枚目が38.9%で、徐々に的中率が上昇していた（ $F=2.71$ 、 $p<.05$ ）。そこで、多重比較を実施したところ、1枚目と2枚目以降、および2枚目と3枚目以降の間に有意な中率の上昇が認められたが、4枚目以降では有意な中率の上昇は認められなかった。以上の結果から、バウムテストにおいては3枚の描画を実施することの有用性が示唆される。

キーワード：バウムテスト、多数回法、有用性

This study was conducted to examine the extent to which the number of drawings on the Baum Test, i.e., the amount of information, might contribute to predictions about the person that drew the picture. The Baum Test using multiple drawing method was conducted individually to the university students ($N=10$, mean age= 20.5 ± 0.7) specializing in clinical psychology. Next, each participant guessed the person that drew the pictures excluding those drawn by themselves.

Changes in the probability of guessing the right person that drew a picture were examined using the successive presenting method. The results were as follows; the first picture: 16.7%, the second: 24.4%, the third: 35.6%, the fourth: 37.8%, and the fifth: 38.9%, indicating a significant increase. Results of Bonferroni's multiple comparisons indicated significant differences between the first as well as the second picture and the third picture. And the finding that the probability did not increase when showing more than four drawings, it is concluded that the appropriate number of drawings would be three.

Key words : Baum Test, multiple drawing method, Usefulness

1. 目的

バウムテストは、その簡便性と有用性によって最も広く使用されている心理検査の一つである。その実施方法はほぼ定式化されているが、2枚法などの変法が用いられることも少なくない（鈴木、2011）。実際、提唱者のKoch（1952/1970）自身も「被験者が2回目にかいたものが、被験者の姿を表わしていることが多く、ほとんどの場面がそうであるといつてよいくらいである」と述べた上で、

「再テストをくり返すことで、より心の深層に到達することができ、かつ同一被験者のいろいろな層を次々ととらえることができる」という考えに基づいた層分析法を提唱している。このことから、被験者に連続的に複数枚の木を描いてもらうことの有用性を指摘することができる。

一方、2010年に岸本らによって邦訳された「バウムテスト第3版」（Koch, 1957/2010）の中では「複数のバウムを描いてもらうのは一般に控えた方がよく、一番よいのは時間的な間隔を開けるこ

とである」との記述がある。確かに、実際の臨床場面において被験者の負担などを考慮すると、多くの描画を繰り返し実施することは必ずしも適切とはいえない。

そこで、本研究ではバウムテストにおいて、実施可能で、かつ有効な描画の枚数を決定するための基礎研究として、描画の枚数（情報量）が描画の作者を特定することにどの程度寄与するかについて検討したので事例を交えて報告する。

2. 予備調査

予備調査は、バウムテストにおいて無理なく描くことのできる枚数を検討することを目的として、臨床心理学を専攻する大学生 89 名（平均年齢 19.0 歳 ± 0.8 歳）を対象に集団式で実施した。指示は、「実のなる木を 1 本、できるだけ丁寧に描いて下さい。次にもう一枚別の木の絵を描いてください。枚数制限はありませんので、できるだけ多くの枚数の木を描いて下さい」とし、A4 版ケント紙を一人あたり 10 枚ずつ配布し、不足が生じた場合は挙手によって紙を追加配布する方法をとった。なお、被験者の中にバウムテストの経験者はいなかった。

その結果、描かれた樹木画の平均枚数は一人あたり 6.0 枚（SD=2.0）で、89 名中 72 名（80.1%）が 5 枚以上の樹木画を描くことができた。以上の結果から、5 枚程度の樹木画であればそれほど心理的負担を感じることなく描くことができると考えられた。

3. 本調査

(1) 方法

本調査では、臨床心理学を専攻する大学生 10 名（平均年齢 21.6 歳 ± 0.7 歳）を対象とした。被験者は同じ演習クラス（ゼミ）に所属する同級生であり、相互に 1 年以上の顔見知り以上の間柄であった。なお、全員がバウムテストの名称は知っていたが、実際に木を描いた経験がある者は 4 名（いずれも授業科目の中で）であった。

調査は 1 週間の間隔において 2 回に分けて実施

した。1 回目の調査では、予備調査の結果を踏まえ、個別にバウムテストを 5 枚法で実施した。指示は、「まず、実のなる木を 1 本、できるだけ丁寧に描いて下さい。描き終えたら次にもう一枚別の木の絵という要領で、全部で 5 枚の木を描いて下さい」とした。

2 回目の調査では、まず筆者が被験者全員に対してバウムテストの解釈法に関するレクチャー（90 分間）を実施した後に、自分以外の 9 名が描いた樹木画（計 45 枚）の評定（作者の推定）を個別に実施した。樹木画の評定は、連続提示法の影響を避けるために、「ランダム提示法（45 枚全ての樹木画をランダムに提示する方法）」の次に「連続提示法（作者ごとに連続して 5 枚提示する方法）」の順で実施した。以上の手続きによって、全ての被験者は 45 枚の樹木画について作者の推定を 2 回ずつ行った。

(2) 結果

図 1 に示したように、ランダム提示法における作者的中枚数の平均は 45 枚中 8.8 枚（19.6%）、5 枚連続提示法における作者的中枚数の平均は 13.8 枚（30.7%）で、作者ごとに 5 枚連続して提示した場合的中枚数の方が有意に高かった（ $t=2.76, p<.05$ ）。

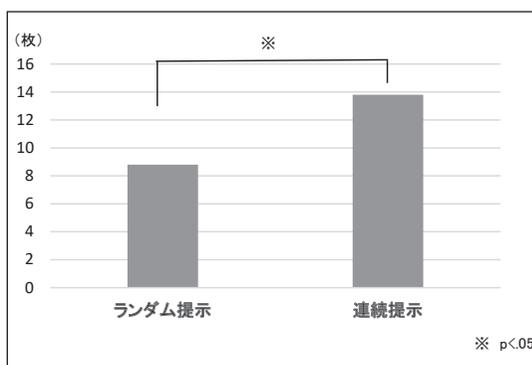


図 1. 各提示法における平均的中枚数

次に、連続提示法において描画の提示枚数が増えるにしたがいが的中枚数（率）がどのように変化するかをみたところ（表 1）、1 枚目の中枚数の平均は 9 枚中 1.5 枚（16.7%）、2 枚目は 2.2 枚（24.4%）、3 枚目は 3.2 枚（35.6%）、4 枚目は 3.4 枚（37.8%）、

5枚目は3.5枚(38.9%)と徐々に上昇していた(F=2.71、p<.05)。そこで、Bonferroniの多重比較を実施したところ、1枚目と2枚目の間に5%水準での有意な上昇(t=3.27)、1枚目と3～5枚目の間に1%水準で有意な上昇(t=3.27、4.64、5.02)、また2枚目と3～5枚目の間に5%水準で有意な上昇(t=3.87、3.67、3.55)が認められた(図2)。

表1. 連続提示法における的中枚数の変化 単位：枚

評定者	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	計
1	2	3	4	4	3	16
2	0	1	2	2	2	7
3	1	2	3	4	4	14
4	2	3	3	2	3	13
5	4	5	8	7	9	33
6	1	2	3	3	3	12
7	2	1	2	3	2	10
8	1	1	1	1	2	6
9	0	1	2	3	3	9
10	2	3	4	5	4	18
平均	1.5	2.2	3.2	3.4	3.5	13.8

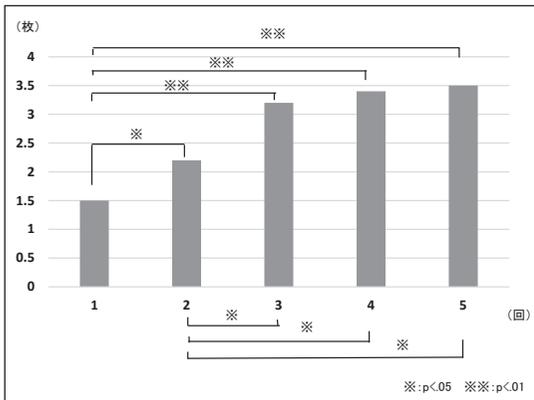


図2. 連続提示法における的中枚数の変化

(3) 考察

一谷ら(1985)が、バウムテストについて「臨床的経験からすると何枚描いてもらってもそれぞれに意味深い表現がみられ、考えさせられる」と述べていること、あるいは青木(1977)が「2枚目からは心の襞(ひだ)のより深部が伺える」と述べているようにバウムテストにおいては描画の複数枚実施の有効性が考えられる。では、複数枚実施において何枚程度の樹木画が適当なのであろうか。これについては、予備調査によって無理なく描くことのできる描画の枚数は5枚程度であることが明らかになり、これを受けて本調査では5枚法を採

用し、描画の提示枚数が作者を同定することによる程度影響するかについて調査した。

その結果、1枚目と2枚目以降、および2枚目と3枚目以降の間に有意な中率の上昇が認められた。また、4枚以上の描画については的中率が上昇しないことが明らかになった。

一方、三船・倉戸(1992)は、2枚法において絵が大幅に変化するタイプと変化しないタイプが存在することを報告しているが、本研究においても後者に分類されるだろうタイプが若干数認められた。的中枚数の変化(表1)からわかることは、これらはいずれも中率の上昇が求められないだけでなく、最初からの中率が低いことに特徴がある。その理由としては、描画表現が稚拙であること、あるいは紋切り型の表現によって描き手の推定が困難になったことが考えられる。

以上のことからバウムテストにおいて複数枚実施する場合は、3枚程度が最も適切であるが、中には描画表現がほとんど変化しない(情報量の増加が認められない)場合もあることが指摘される。

4. 事例

次に、描画を連続的に5枚提示した際、評定者による作者の的中率がどのように変化するかについて実際の事例を提示しながらみていきたい。今回取り上げる事例は、21歳、男性で、性格的には控えめで対人関係はやや狭いものの、学業成績に問題はなく、特に不適応感は認められない学生である。

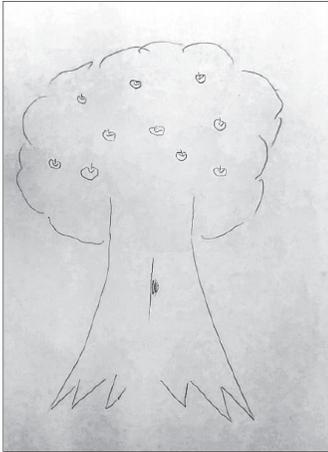


図3. 1枚目の描画

1枚目の描画提示で作者の同定に成功した評定者は1名のみであった。描画の特徴として樹幹と根のラインにわずかな隙間（不連続）が見られるものの、樹木全体の大きさとバランスには安定感が認められる。また、筆圧、幹の太さ、あるいは実の数からは自我の強さや精神エネルギーの高さを感じられる。幹の中央部にある傷跡か節穴と思われる黒い部分は、過去に経験したネガティブな出来事（外傷体験）を示しているとも考えられるが、9名の評定者の中にこの点を気にする者はいなかった。



図4. 2枚目の描画

2枚目の描画提示で作者の同定に成功したものは3名であった。一枚目の描画と異なり、樹の上部が用紙からはみ出し、樹幹部分が表現されていないことに特徴がある。また、枝に葉がないこと

もあり、豊かさは感じられない。また、一枚目に比べ樹皮が目立つようになっていることや、左に突き出した枝から外界や対人接触を意識し、内面に意識が向いていることが推測される。尖った枝は刺々しさを感じるが、ひな鳥の存在が未熟性と同時に遊び心の存在を感じさせる。一枚目の描画では作者の同定に成功しなかったが、2枚目の描画で成功した評定者は、こうした点を考慮したと思われる。

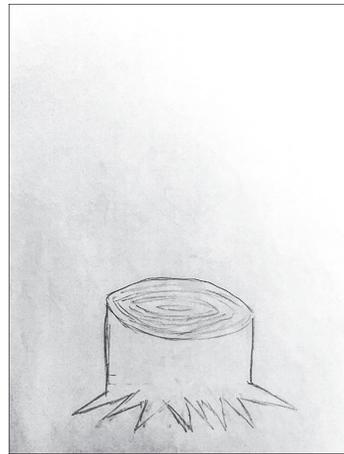


図5. 3枚目の描画

3枚目の描画提示で作者の同定に成功した評定者は4名であった。描画の特徴としては、何といても「切り株」という度肝を抜いた表現である。描画の提示に際し、実際に多くの評定者が描画から受けるインパクトの強さを表明した。バウムテストにおける切り株の解釈としては、一般的に重篤な外傷体験の存在が挙げられる。評定者の中に作者の私生活におけるその存在を知るものがいたかどうかはわからないが、2枚目で作者の同定に成功した3名の中に意見を変更する者はいなかった。



図6. 4枚目の描画

4枚目の描画提示で作者の同定に成功した評定者は3枚目の成功者と同じであった。4枚目の描画特徴は(2枚目と同様に)樹幹の上部が描かれていないことに加え、根元を囲っている枠とその中の石の存在で、これは防衛や孤立性の表現と解される。また樹皮の表現もより目立つようになり、対人面での敏感さや防錆の存在が感じられる。

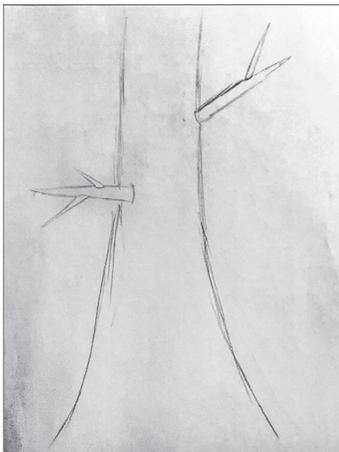


図7. 5枚目の描画

5枚目の描画提示で作者の同定に成功した評定者は5名であった。4枚目までに同定に成功した評定者の中に評定を変更する者はいなかった。描画は、これまでと同じく樹幹部分がはみ出しているが、枝は左右両側に見られ、バランスの面では若干安定を取り戻している。ただ、枝は立体表現な

が枯れていて、かつ先端の尖り方からは相変わらずの敏感さが感じられる。この点は幹の輪郭線の重なり表現からも推察される。

5. 結語

一般に心理テストには妥当性と信頼性が重視されるが、同時に実用性に優れていることも臨床場面では求められる。その点でバウムテストは比較的短時間で実施でき、かつ紙と鉛筆さえあればどこでも実施可能という実用性に優れていることから広く使用されている。また、複数枚実施することで情報量を増加させることが考えられ、臨床現場において2枚法が実施されることがあるが、今回の研究によって3枚実施の有効性が示された。

注) 倫理的配慮

本研究においては、書面にて研究の主旨説明を行い、全協力者から事前承諾を得た。また、提示事例についても、書面で提示の承諾を得た上で、その記載においても個人の特定に繋がらないよう必要最小限の情報記載に努めるなどの配慮をした。

文献

- 青木健次 (1977). バウム・テストにおけるバウム・イメージの多様性を測る. 心理測定ジャーナル, 13, 19-23.
- 一谷強・津田浩一・山下真理子 (1985). バウムテストの基礎的研究〔I〕-いわゆる「2枚実施法」の検討-. 京都教育大学紀要 A 人文・社会, 67,17-30.
- Koch,C.(1952). *The Tree Test: The Tree-Drawing Test as an aid in Psychodiagnosis*. Bern: Bern: Verlag Hans Huber.
- 林勝三・国吉政一・一谷強 (訳) (1970). バウムテスト-樹木画による人格診断法-. 日本文化科学社.
- Koch,K.(1957). *Der Bautest.:der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3.Auflage*. Bern:Verlag Hans Huber.
- 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房
- 三船直子・倉戸ヨシヤ (1992). バウムテスト2回施行法試論 I -基礎的調査資料-. 大阪市立大学生活科学部紀要, 40,313-327.
- 鈴木郁子 (2011). バウムテスト2枚施行法における樹木画の特徴とパーソナリティ特性との関連. 浜松学院大学研究論集, 7, 51-60.

